

昭和
四十六年

七月二十三日

発行（毎月一回・十五日発行可）

（通第二六〇号）

慈光

第二十三卷

第一号

目次

讃仏の歌

慈愛と真実

近角常観

(3)

歎異抄聞書

花田正夫

(11)

——池山先生より——

若い世代は何を求めている

柳瀬留治

(15)

臼杵老師語録

柳瀬留治

(18)

ともしび

聚墨生

(22)

讃

仏

の

歌

(華嚴經)

一、
御仏に、あいまつらんは
限りなき時のまに、ただひとたびぞ
もろもろのさわりを離れ
ひたすらにみのりをうけよ。

われらは、惱みの海に沈み
よこしまのこころ、おののく
御仏は、なさけもて
きよき世界をしめしたまう。

みひかりの、おののに
かぎりなき、みほとけます
いろいろのてだてもて
われらを救いたまう。

御仏の身は、清くしてしずかなり
御光は、なべて世を照らせども
まことはしずかにして、すがたなし。

この御声あまねくいたり
人々は、器(うつわ)に隨いてさとり
おのの御教は一つとおもえり。
御仏の境界は、はかりがたし
限りなきみおしえも、
一つ御声にてのべたまう

二、
なべて世のたのしみのうち
きよきしづけさにしくものぞなき
穢れなき御法は御仏の室(へや)
さながらに見るは、御仏のまなこ。
すべてわれらの国々は
仏の一毛のうちに入りて足らず
まことみ仏のみなさけは
大空のごと広やかなり。

数々のたえなるはたらきを現わし
不可思議のてだてをもて
人々を淨き世界に入らしむ

おおきよきざとりの世界よ、功德の海よ
ゆかりある人等これを聞かば
道を求むる心を起し
遂にまされる身とならん。

(新訳仏教聖典、序歌)

三、
はかりなき時の昔、
生死のなやみ、永く尽くし
われらに、きよき道をひらく
み仮は智慧こそ清らかなれ、

生よ死よ、老よ病よ
憂き悲しみの、なやみせまれる
人も一たび仏に会えば
こころは清き世界に入らん

数しれぬ国々には
深き功德みちみぢて
穢れなき仏の子等、多く集い
常にみ法の声を聞き入る
仏は獅子の座にましませども
あらゆる塵埃(ちり)の中にもいます。



慈愛と眞実

近角常観

一、はしがき

如來は一切の為に
常に慈父母となりたまえり。

当まさに知るべし、諸の衆生は

皆これ如來の子なり。

世尊大慈悲をもて、

衆のために苦行を修したまうこと

人の鬼魅（きみ）にくるわされて

狂乱所為多きが如し。

これは涅槃經の偈でありますて、父母の慈愛極まりなき

ありさまを、仏の大慈悲にたとえられた適切なる教訓であ

ります。

この偈文は甚深微妙にして、ほとんど云い尽くすことの
出来ぬ無限の意義がこもりてありますて、その人々の経験

次第によってどれだけでも深い味を感じることが出来よう
と思いますが、その要領を言えば、親がその子のために、
一生の間全身の慈愛と眞実を尽くして、如何なる苦労をも

の機会を与えられたことを感謝するものであります。

二、告白

三谷氏は自分を語ることを避けられたため、言葉にあら
われたものは、所感の万分の一にも過ぎぬと思います。併
し同氏の告白のままを聞くことが、此書を御覽になる方々
の望まるることと思ひますから、同氏の本意ではあります
まいが、柱（ま）げて同氏の言葉のままを書かせて頂きま
しょう。いわく、（夫）

母は年若くして父に別れ、浮世の辛酸と戦いつつ四人の
子女の教育には如何ばかり苦労せしか。村の旧家、昔の庄
屋といっただけに、家の体面、世間の交際、かれこれの心
遣いに人知れぬ心配をせられたことは、むしろ生れながら
貧しい家庭にあって、一意専心向上努力するよりは、一層
困難であつたろうと思う。

やゝもすれば激しやすき自分をして、大なるあやまちな
く、今日あらしめた所以のものは、もとより岩崎恩家の殊
遇によるものなるはいうを待たざるも、幼時における母
の教養と、生涯を通じての絶対愛のたまものに外ならずし
て、けだし人間たるもの愛と誠の外に道はなしと私が確信
する所以のもの、母より受けた自身の体験によつて、一点
疑うの余地がない。

犠牲をも辞せざる有様は、たとえて見れば、あだかも魔物
に魅（み）せられて、狂氣の沙汰であるかの様に思えると
いう。如何にも絶対無限の親心を、極端なる形容をもつて
説かれたる聖言であります。この如き親の絶対の慈愛と真
実とが、子たるもの的心に徹到して見れば、泣血感激せざ
るものはないとの大獅子吼であります。仏教の真髓も、結
局この絶対の大慈大悲を感じるの外はありません。

このたび、三谷氏の母堂が示寂せられましたについて、
母堂が一生の間、同氏に対する絶対の慈愛と眞実につきて
追慕感字（かんぶ）おく能わざるのあまり、同氏は葬送を
おわりて帰京せられし翌朝早々おたずね下されて、満脛の
所感を披瀝されまして、胸塞がり声絶えて、談話を続ける
能わざる有様であります。

この際これを機縁として信仰的小篇を書くようにという
依囑（いしょく）をうけたのであります。私は平素前記の
偈文をもつて信仰の告白として居るものでありますから、
同氏の所感を因縁として如來の大慈大悲を讀仰する不思議

母の一生を通じて、この絶対愛の実現ならぬものなけれ
ども、今なお心肝に銘じて忘るべからざるものの中の二三
を述ぶれば、自分の東都に遊学せしは、明治二十年、數え
年十七歳の春なりしが、余のしばしば遊学志望の申出に対
して、道中その他の不安を慮り、手放しを欲せず、如何に
しても聞き入れざりしが、あだかも静岡に住せる宮原木石
という祖母の弟が、展墓のために帰郷せしかば、好機逸す
べからずと、同伴を強要せしも、母の余を愛するのあまり、
決して許さず、余も亦執拗（しつよう）にも絶食して
駄々をこねたれば、遂に柱（ま）げて母もようやく許可を
与えくれし次第にて、今より思えば手放しかねし母の慈愛
と涙ながらに断念して許してくれし母の心緒（しんしよ）を
思えば、實に断腸の念に堪えぬ。

また上京後も音信絶ゆることなく、常に安否を気遣うと
共に、毎月定額の仕送りにて或は不足せずや、不自由はし
て居らぬか、病氣の際は直に医師に診て貰えよとて、世上
にありがちなる其子弟に対して、学資其他の節約を命ずる
が如き書信を受けたることなく、しかも郷里における家計
必ずしもゆたかならずして、母の身自ら奉ずること極めて
薄く、もとより何等の耳目を楽しましむることなく、粒々
辛苦して伝来の財産を維持し居たる、その苦衷を知る余と
しては如何にしても感謝せずには居られなかつた。

又、余の一橋在校時代に岩崎家子弟のお傳役（もりやく）として、学生係より推薦を受くるや、親戚先輩の多くは、余の将来のため、一も二もなく贅意を表せしも、ひとり母は、それがため余の心身を過労せんかとて、容易に承諾をあたえず。余はかくの如き仕事は最も好む所にして、

決して過労せざるのみならず、かえつて自己修養のためにしたのしむところなりと切言すれども、中々聴き入れず、終に亡父の親友にして父の死後郷里における唯一の相談役たりし石井英太郎氏の助言を得て、ようやく納得せしめたるが如き、如何に母の慈愛の情緒綿々たるものありしかば今は今なお忘るるあたわざることころである。

又かの三十三年に於ける北清事変、続いて三十七八年に跨れる日露戦役に余の従軍せし時の如き、母は毎週一回殆んど音信を絶ちたることなく、もとより戦時中の事ゆえ、居所不明にして何れに駐屯し居るやも知れず、従つて手紙が何の日に余の許に着くやもとよりわからず、行進中の如きは一月以上もかかりて内地の書信に接したること珍しからざる程なりしが、母は着くと着かぬは問題にしなかつたのである。唯子を思う親心、子を愛する一念、毎週一回は発信したのである。従つて内地より他から手紙のなき時といえども、母の慰安の手紙の一通だけは到る処郵便の度毎に必ず見出すことを得たのである。他郷、殊に戦時異境に

く」として、学生係より推薦を受くるや、親戚先輩の多くは、余の将来のため、一も二もなく贅意を表せしも、ひとり母は、それがため余の心身を過労せんかとて、容易に承諾をあたえず。余はかくの如き仕事は最も好む所にして、

決して過労せざるのみならず、かえつて自己修養のためにしたのしむところなりと切言すれども、中々聴き入れず、終に亡父の親友にして父の死後郷里における唯一の相談役たりし石井英太郎氏の助言を得て、ようやく納得せしめたるが如き、如何に母の慈愛の情緒綿々たるものありしかば今は今なお忘るるあたわざることころである。

又かの三十三年に於ける北清事変、続いて三十七八年に跨れる日露戦役に余の従軍せし時の如き、母は毎週一回殆んど音信を絶ちたることなく、もとより戦時中の事ゆえ、居所不明にして何れに駐屯し居るやも知れず、従つて手紙が何の日に余の許に着くやもとよりわからず、行進中の如きは一月以上もかかりて内地の書信に接したること珍しからざる程なりしが、母は着くと着かぬは問題にしなかつたのである。唯子を思う親心、子を愛する一念、毎週一回は発信したのである。従つて内地より他から手紙のなき時といえども、母の慰安の手紙の一通だけは到る処郵便の度毎に必ず見出すことを得たのである。他郷、殊に戦時異境に

ありて、此の慈愛の音信を手にしたる感想は何とも云えぬ嬉しさであった。しかもその度々の手紙に無事か、身体を大事にせよと、同じ文句の繰返しが見る度毎に身に沁みわたりしが、嗚呼かくまで愛と誠とを以て我を生育し呉れし母は今やすなわち亡し。

余は此の年になりても母に対しては子供心であった。何か善いことがあつたらば之を報告して楽しみと共にせんと、一身上の事細大となく母を中心として、生き甲斐あるもののように思いしに、今や生涯に於ける此の最後の標的がなくなりて、我が生涯の方向が一廻転したかの如き感がある。而してかく忽然として母を失うて、最後に理想として永久忘るる能わざるものは、母によりて教示せられたる絶対の慈愛と眞実なる人生の大道である、と。

三、示却の親

釈尊が一代の教化を終わられて、跋提河（ばつだいが）の畔、沙羅雙樹の間に於いて、病を現（げん）じて涅槃に入られんとする時、弟子は泣き哀（かなし）みて曰く、如來は智慧の灯（ともしび）なり、苦海の船筏（せんばつ）なり、願くは我等の為に永く此世に止まりたまえと。其時仏の説かれし最後の説法が涅槃經である。涅槃經は仏の遺言である。その涅槃經の要点は左の四句の偈文に結帰するのである。

りの境界である。これが永劫の如来である。その如来は常住にして更に変わることなく、千古汝等の親として大慈大悲を以て一切衆生を攝取せば止まぬという釈尊最後の御遺言である。

このたび三谷氏が現世の親を失われたは如何にも哀悼極まりなきことなれど、この『涅槃經』の説法の如く、母堂も此世を去り、彼世において成仏して、永劫の親となりで我等を照鑒護護（しようかんしょうご）せらるることは一点点疑いなきことである。

弥陀の願船に乗じて、生死の苦海を渡り、報土のきしつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらわれて、尽十方無碍の光明に一昧にして一切の衆生を利益せんときこそさとりにはそらえ。

とあるが實に涅槃の妙境界である。かく考えきたれば一面には、哀別離苦の血の涙は、如來常住の慈悲の涙でとろかさるのである。

如來の色身（しきしん）は滅すといえども法身（ほつしん）は滅せず。如來は常住にして、變易することない。法身ということである。法身といふは永久無形の仏の灯（さとし）。

といふが『涅槃經』の真髓である。色身といふのは有形の身体のことである。法身といふは永久無形の仏の灯（さとし）。

全体仏教には消極と積極の両面あることを忘れてはならない。まず他の教は人生を樂觀せんとする積極一面を説きて、その消極の方面を顧みぬ。故に人生消極の事件に遭遇したるとき破壊されることが多い。仏教にては、人生そのものを以て、常住・安樂・主我・清淨なりと考うるは、凡

夫の四顛倒（してんとう）と名づけて、人生の真相を全く反対に見誤りたるものなりというのである。「色は匂へど散りぬるを、我が世たれぞ常ならむ。」と云うは、その消極的一面を喝破されたのである。しかしこの意味を理解することは容易なることなれども、これを体験するにあらざれば何の効もない。釈尊が寂を示されたは仏弟子に対しても、一たび母堂に本復してもらいたいと心血をそがれしも、人力を以て遂に如何ともすべからず、終に母堂が示寂されたるは、一生の間、同氏を撫育成功せしむるために粉骨碎身せられたる上、最後に亦身を以て諸行無常の大教訓を与えたのである。恐らくは同氏として何物を以てするもかくのごとき大消極の説法を感じることはできぬであろう。

しかし仏教は決して消極一面の教には非ず、その消極を

説くは絶対の大積極を説くためであることを忘れてにならぬ。ややもすれば古今往々その消極的一面のみを見て、仏教は厭世悲觀の教なりと誤解するが多い。仏教の歴史に小乗・大乗ということがある。全体仏が小乗を説かるはずはないのであるが、いたずらに仏の言説に拘泥（こうで）し、もしくは独自の小観に囚われて、遂に消極的一面

のみに墮したのが小乗である。その弊を打破して絶対の大積極を顕現し来たりたのが大乗である。

一幅の涅槃像に示さるるごとく、如來の入寂は一切衆生をして悲泣号哭（ごうこく）せしめ、灯火の滅するがごとく無明の世界たらしめたのである。しかし如來は「有為の奥山今日越えて、浅き夢見じ醉ひもせず。」と、真如法性の境界に帰りたまいて、無碍の大光明を放ちて、却って穢土に残れる我等の永久の御親となりて下されたのである。ここにおいてや、涅槃の四徳として常樂我淨の世界が開けたるのである。是が即ち法性常樂の如來である。無有交易（むうへんやく）の如來である。無漏清淨の世界である。法性常樂の世界である。今三谷氏の母堂も、身自らこの極樂世界に往生して、永劫の御親たる如來大悲の願心を我等有縁のものに知らしめたまうことを感謝せねばならぬ。

四、如來の聖行

如來が我等がために法を求めるとして苦行を修したまいたことにつきて、前記四句の偈に關して雪山（へせつざん）の菩薩の説話が『涅槃經』に説かれてある。これはすこぶる味わい深き教訓なれば、その大略を述べてみたいと思う。過去世において仏が菩薩として道を求められし時、人生の常樂の法を悦びて、未だ大乗の教を聞くことを得なかつ

た。その時ヒマラヤ山即ち雪山に住せられた。その山は清浄にして、花咲き、泉流れ、鳥歌い、果実熟し、人生の快樂一も欠くるところなかつた。しかれども修行者は少しも法を知らず、大乗の名だに知らなかつた。それゆえ如何に難行苦行をなしても眞実の道を求めるとして、これがために自己の身を捨つるも慳（お）しからず、衆生を利益するためには如何なる財産をも捧げ、あらゆるものを犠牲にしても無上菩提を求めるなど誓われた。帝釈天（たいしやくてん）が遙にその様を見ておもえらく、實に菩提心は動転しやすいもので、水中の月の水動けば影亦動き、絵師の像を画くに、勿ち壊れやすきが如きものである。彼の求道者は果してその志を貫徹するであろうか、之を試みようと思うた。金を試すには之を焼き、之を打ち、之を磨して、はじめて真正なることが知れるのである。彼の苦行も此の如き試練を経ねばならぬと。そこで自ら身を変じて羅刹の形をあらわし、雪山に至りて遠からざる所に立ちて、清雅なる声を以て過去仏の説かれたる半偈を宣べた。

諸行無常、是生滅法。

かくして菩薩の前にその姿をあらわした。その形貌頗る怖しきものであった。菩薩は初めて二句の法を聞くことが出

来て、如何にも歡喜に堪えなかつた。旅人が険路に伴侶を失うて、再び遇（あ）えるが如く、危篤の病人が回生の薬を得たるが如く、難船の人が救助に遇つたが如く、幽囚の人が牢獄を出するが如くであつた。何となれば、今迄は雪山の榮華を愛し、人生の快樂をのみ悦びたるに「色は匂へど散りぬるを、我が世たれぞ常ならむ」という聖訓を聞いて、人生無常の真理を悟りたからである。そこで何人かかくの如き法を説きたるかと怪しみて、起ちて四方を見廻わすに、誰も居らぬ、ただ恐しき羅刹を見るばかりである。そこで菩薩の云うには、誰がかくの如き解脱の門を開きて、生死の睡りをさますべき大法雷を震（ふる）いたるや。実際に我この半偈をききて、我が心を啓悟（けいご）せしむること半月のごとく、蓮華のようやく開くが如くである。何となれば、前にも述べたる如く、人生は無常であるといふ消極の半面のみを説きて、余の半面は未だ説かれておらぬゆえである。是非とも他の半偈を聞きたいものである。そこで羅刹に問うて曰く、汝は何れの處にてかくのごとき半如意珠を得て来たか。今汝の説きたる半偈は、過去・未來・現在諸仏の説きたまう正道である。希（こいねが）わくば、我が為に後の半偈を説きたまえと。羅刹答えて曰く、我多日飢渴に苦しめられて、心乱れて囁語（げいご）したるばかりである、とても説くことは出来ぬと。菩

薩曰く、然らば何なりとも汝の欲する食を与うべしと。羅刹曰く、我食うところは人の煙肉（だんにく）、我飲むところは人の熱血なりと。修行者が果して身を捨てて道を求むるの志あるや否やを試練するのである。實に是れ人生問題において、無常生滅の羅刹があらわれて、我等を食わんと迫り來たるのである。諸行無常の教訓は、親に別れ、子を失いたるがごとき實際問題に遭遇して、いよいよ我身を捨つるに非ずんば、真の道を得べからざるを諷示したのである。

修行者はさすがに真剣である。即刻答えて曰くそは易きことである、汝、我がために後の半偈を説かば、この身を捧げて供養すべしと。羅刹笑つて曰く、誰か汝が言を信すべき、何となれば、汝が道を求むるはそもそも何の為ぞ。定めて道を聞きて大いに為すあらんと欲するためである。もし道を聞きて直に死したらば、何の益にもたたないであろうと。實に味わい深き試問である。世の人々勵かんがために信仰を求め、人格を高めんがために信仰を求め、成功せんがために信仰を求める人ならば、この羅刹の難問を通過することは出来まい。

菩薩即答して曰く、汝既に我に教えしにあらずや、「色は匂へど教りぬるを、我が世たれぞ常ならむ」と。我今その散りゆく無常の身を捨て、永劫不変の金剛身を得んとする。

身を捨てんとす、後の衆生この偈を聞く者、ただいたずらに文句をききたるばかりにしては、眞実を知るべからず。我一切衆生の為に、身を捨てて道を求めたのである。世の慳惜（けんしやく）の人、少施を以て貢高（こうこう）の心を起こすものあらば、我一偈のために身命を捨つること草木の如くせるを見せしめよと。即ち身を放つて樹下に投じたのである。菩薩未だ地に達せざる時、羅刹忽ち帝釈天に身を現じ、空中において菩薩を接取して平地に安置し、菩薩の足下に頂礼して曰く、「善哉（よいかな）、善哉、真に是れ菩薩なり。衆生を利益せんがために身を捨て、無明黒闇の中に大法炬を燃やしたまう。願くば我菩薩を試みし罪を聽（ゆる）したまえ」と。忽然として見えなくなつたのである。

實に意味深長の説話である。身を捨てて、しかも活きたのである。人生は眞に身命を捨てて、はじめて大いに酬（むく）いられるのである。酬いられんとして働くものは身を捨つる能わざる人である。死を増して呴喊（とつかん）したる人は、戦い勝ちて凱旋するの光榮が与えられるのである。「心だに誠の道にかないなば、祈らずとも神や護らん。」人生生活の要訣は、この説話を尽きてある。特に仏教の真隨（まつぐれ）は、この一偈に蘊蓄せられて、甚深微妙の極まりである。「懸崖（けんがい）」に手を放ちて、絶後（ぜつ）

るのである、瓦器を施して七宝の器を得るがごとくである。朝に道を聞かば夕に死すとも可なり、我豈（あに）法の為に穢身を捨つるを吝（おし）まんやと。答案は明瞭である。羅刹曰く、可（よ）し、諦（あきら）かに聽け、我汝の為に余の半偈を説くべしと。曰く、

生滅滅己、寂滅為樂。

「有為の奥山今日越えて、浅き夢見じ醉ひもせず」積極的な大乘涅槃の真如の都はあらわれ来たりたのである。永劫変らざる如来常住の境界は我等を照鑒したまうのである。はじめて無量寿・無量光の如来は十方微塵世界を尽くして、無碍の光明を放ちたまうのである。菩薩は大満足をしたのである、眞に無明の夢が覚めたのである、煩惱の醉が醒めたのである。そこで菩薩は約束のごとく身を施さんとするのである。しかし後の衆生のためにこれを書き遺さんとて、石や、壁や、樹や、道や、いたるところにこの四句の偈を書写したとある。嗚呼我國にはこれを『伊呂波歌』に書きあらわして、國民文学の習いはじめとせられたるは、弘法大師の用意深き、驚くばかりである。そこで樹に上りて、身を投じて羅刹に与えんとした時に樹の神これを見て何事を作すぞと咎めた。菩薩曰く、我半偈のために

「ごに蘇る」というもこれである。「たとい法然聖人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう」とあるもこれである。如来は堕つる我等を受け留めたまうのである。地獄必定の我等を救済したまう攝取不捨の誓願である。これが如来が菩薩たりしどき、我等がために聖行を修したまいし過去の因縁の随一である。

惠 空 師 語 錄

釋迦法師の云いけるように「妄念は、おこらばおこれとうちすてたまえ」それをおこさじと相手になりたまえは、

敵はつよく、力は弱し。われとかなう道にあらず。よしや思ふようにたしなみ得たりとも、それは後世のたよりとはならじ。

されば土の馬を洗いきよむとも、わが身の貪瞋、妄想をきよむべきこと難し。この故に妄念妄執のやまぬなどいう氣遣いをやめて、その心を本願の方へひき向けたまうべし

歎異抄聞書

2

一池山先生より一

花田正夫

兩聖人の吉水の会見

何たる崇高な、凡そこの世にありうるかぎり莊嚴な場面でしよう！このいとも静かな会見の席で、親鸞聖人の胸裏に点火された絶対他力の心光は、七百余年をへだてる今に私どもの上に直射しつつ、永久に限りなく、胸から胸へとうつされて行くのであります。

憶念の心

弥陀の名号となえつつ 信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもいあり

憶念のこころつねにしてといふのは、第十六章の文句をかりて云えば『ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なることづねにおもいだしまいらす』こころであります。親鸞聖人がよきひと法然上人の仰せを信じた刹那、内臓に刻まれ

すてんとも面々の御はからいなり』聖人は決してわるずすめはなさいません。一寸聞くと縁なき衆生は度しがたしと

軽く突き放されたような、さりとはなきのうすい仕打とも感じられるようですが、聖人のこの思い切りのよい言葉の裏には、一方、自分のはからいで、人に念佛をもうさせることは出来るものではないという確信と、他方、弥陀のおもよしのお手篤さの期待があるからです。丁度『地獄におちたりともさら後に悔すべからず候』という思い切りのよい言葉の裏に、一方『地獄は一定すみかぞかし』の確信と、他方、弥陀のおはからいにまかせまつる心安さがあると同じように。

心光の攝護

『親鸞におきてはただ念佛して弥陀にたすけられまいらずべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり』これが私への東岸の声であります。

爾來十有幾年、愛欲の波をかぶり、瞋嫌の焰にあはられ

ながらも、『たゞ念佛して』の白道の生を続けさせていただくのは、ひとえに心光の攝護によるところでござります『誠に知んぬ、悲しい哉愚鴟鷲、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まず、恥すべし傷むべし』私に代つ

た文句が、『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける、本願のかたじけなさよ』という聖人の御持言であります、これがすなわち憶念の心であります。このかたじけなさの思いに湧く念佛がほんもので、自分の称えることに価値をつけて、或目的に用立てようとする念佛は、にせものであります。いわゆる自力の称念としてきらわれるのではありません。何のはからいもまじわらない、順彼仏願故、すなわち、本願に相応した、如来選択の願心に順応したのでなければ、本当の信心の念佛とはいえないのです。

面々の御はからいなり

『このうえは念佛をとりて信じたてまつらんとも、また

て言いにくいことを言つておいて下さったお言葉です。

相対根性

信心をいただいたら、おのずから心が清まるものと、かつては想像していたのでしたが、それは善人となれば往生できるという通途の相対的の考え方にもとづく無理もない誤解です。

中心から外周までまるつきり煩惱で固まっている炭団ですもの、いくら信心の磨きがかかつたからって玉になる筈がありません。『持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかでか生死をはなるべきや』です。心が清まるのが信仰の誓約であろうなら、私にはそうした信仰の確立する時機がありません。それを見抜いての悪人救済の本願が絶対他力のありがたさであり、絶対不二の教である所以であります。

絶対他力の鏡

私どもの姿がうつるのはこの他力の鏡です。この鏡の絶対性は、私共に私共の真相を凝視する可能を保証します。この保証があればこそ、私共は鏡にうつる己が影を見て、『まことによくよく煩惱の興盛に候にこそ』と、悪人の自覚が獲られるのです。と同時に究竟の理想成遂の上には他

力の絶対性がかくべからざるものであることがうなずかれ、その半面に自力作善の相対的善人根性が否定されてしまます。自力作善のやまないのは、まだ絶対他力の鏡に照らされていない証拠です。

我ならぬ　きよらの我　我にありて

穢惡の我を　我にしらしむ

これは私の近詠です、きよらとは清淨ということです。

清淨の我が、私の中にあるはずはありません。若しあるとすると、それは私ではありません。しかし私に私の本質

が穢惡の我とどうして知れるでしょう。それをそうと知らせるのが、きよらの我でありますまい。私ではないきよらの我が、いつ私の中にはいつたのでしよう。それは「声

『念仏もあさんとおもいたつこころのおこるとき』にはいつたのです。子を思う母が、子の中にあるように、私を思うきよらの我是、私の中にあるのです。そしてその選択採取の白業をもつて、私の無明煩惱の黒業に対照せしめて、私に『穢惡汚染にして清淨の心なく、虚偽詔偽にして眞実の心なし』と気づかしてくれるのです。

食贋煩惱中に生ずるという清淨願往生心とは、この我ならぬ我的ことを指すのでしょうか。或は本願廻向の大信心と

か、或は如來選択の願心とか、或はまた一口に信仰とか、念仏というのも、つまり別のものではないでしよう。即ちよりは、むしろ一緒に歎いて下さいます。この意味で聖人も、私にとっては我ならぬ我であります。

実を申しますと、私には我ならぬ我と一緒に、もう一人私の中にいる人があります。それは外ならぬ聖人です。聖人も私の中にいて下さって、私共の穢惡性を戒めるというも、私にとっては我ならぬ我であります。

疲れたる旅人の　あおぎみる大空に

さまざまの姿して　わきあがる雲の峰

わきあがりやがてまた　くずれ行く雲の峰

われはまた日毎みる　たのみなき雲の峰

群賊悪獸の煩惱につきまとわれて、曠野をたどる旅人の姿です、さまざまのまどわしの姿した名利の幻影が、はかなく崩れ行くあとから、さらにまたわきあがる愛欲の雲の峰。

わきあがりやがてまた崩れゆく雲の峰です。幻滅又幻滅、さだめなきがさだめなる流転の旅、私の人生の行路は恥ずかしながらこうしたものです。

旅　の　伴　侶

『あれは旅人だ。あのけわしい山を越えて来たのだ。登りつめたらあると思つた花の都の予想がはずれて、また荒涼たる曠野に出たのだ。

彼は今がつかりして崩折れるように道ばたの石に腰をおろして、額（ひたい）を手にささえている。その手の指のさきまでも、すっかり力が抜けているのだ。上りながら胸一杯に吸いこんだ多彩の憧憬は、陰暗な幻滅の吐息となつて、彼の口からもれている。

おや！一人旅かと思つたら優しい少女がついている。少女は彼をいたわつて、しきりにその背を撫でている。そして何か訴えている。なに？『苦惱の有情をすてずして』だつて？……少女の仰ぐ天の一方から虹のように一条の光明がさして、旅人の身にかかる『これは或団の私の日記です。

（仏顕のたのもしさ）

『あたら身を仏になすな花に酒』無明の酒に酔いしれた

醜さを、他力の鏡に見てとりながら、耽溺（たんでき）の夢からさめる氣力もない。まことに無慚無愧の甚しきもの

です。これから悔改めるというのは、あまりに見え透いた嘘です。

念　仏　の　息　杖

『衆花生に醉わば済度に我れ醒めん』そうした悪業にひきずられる私を、一人子のようにおぼしめして、どこどこまでも見棄てない親心を仰ぐとき、何とも言えない頗もししさを感じます。朝日に匂う山桜をみては、心が花に吸いとられて、胸がすうと開くかと思うと、花が心の所在（ありか）を一杯に占領するように、弥陀の御恩の深重さがみじみと思い出される胸の中には、おのずからなる念仏を合図に、み親の心が充ちるのを覚えます。

（信を行く旅人）より抜き書。

丘　の　春

（池山先生作）

歳旦にまずおとずれし念仏かな

ここはまたどうしたことで暖かき

仰向けに仔犬ねころぶ日南かな

たまさかに如来に面す春の風

紅梅を見せてわかるる恨かな

一人いてよろこぶこえや明けやすき

若い世代は何を求めている

柳瀬留治

今の若い世代はどんな人生観をもち、どう生きようとしているであろうか。

私は牡年層に接しては幾分の察しもつくが、青年層に対して扱んでいる所が乏しい。僅かに日常接した狭い範囲の青年層の指向を時代思潮の上にあわせ考へておきたい。

戦後育てられてきた民主主義的考え方、これは主にアメリカによる民主的思想であるが、可成青年層に浸透した。しかしその都合のよい点だけのようである。民主主義は一方のソ連によるコンミニズムより受け入れ易いようである。その社会主義傾向はインテリ層でも老人に少く、牡年層以下に見るようであり、時に生物学的思想とこの唯物的な点がミックスしている者があるよう見られる。

大体に青年達は、知識として育てられた自然科学に根をすえていて、それに若くて元氣で体力的なので、生物的な我武者羅と旺盛な欲求をもつていて、それが既成社会に接し、そのままが容れられず、社会的抑制をまぬがれるわけ

害ねる行為を差しひかえさず程度でしかない。倫理学でもほとんど功利説となり、社会人類の利益のためのもので、アメリカのプログラマチズムの実利主義である。最早、孔子の説いた「仁」の如き、おのれの内を省みる「忠恕」の道など古臭いものとしてかえりみられない。カントの「至上命令」というものは哲学で神に基盤をもつから宗教への橋といえようが、哲学の学説でしかない。

とした現代であるから、ほとんどの青年には自らを律し己を率いてゆく指導理念といったものの持合せではなく、従つておのれの利益と生の享樂をモットーとする他はない。で生きるために欲求の命ずるところ、その遂げる手段を選ばぬこととなる。殊に近年は栄養事情がよくなり体育が盛んになり、年々青年の体位が向上し、従来二十歳で成人に達する所が十八歳で上廻った体位を示し、又体力に伴つて性慾も成熟する。それに野放しの性文学やエロ雑誌、映画などがあふりたてる。男女青年の風紀が乱れるはすである。それに親のしつけも時流であつて見れば、生活經營のためコツコツと根気よく事をなすのが七面倒になり、知能の先き走りと体力の突き上げとで、一撃千金の悪事犯行に走るのも無理からぬことである。

それが知識層の青年にも見られるようである。ただ知性をもつて危いところで喰い止めている程度である。元來知

にはいかず、それを敢て排除し遂げようとする。勿論社会の伝統も未知であり、自己の真価とか、力の限界もわきまえぬのが多いようである。それに民主的平等思想と自然科学的生物的な自我肯定の思想が裏付をし、自信づけをしあつてゐる氣味がある。

アメリカの民主主義の裏にはキリスト教的人道主義が基礎をなしているが、日本のそれは宗教にかわる何物もない。祖先以来の仏教といつても葬式用に形式化したものが多く、生きた体の魂をゆり導く力をもつものが一二の宗派にとどまり、他は無力と言つてよい。だから生活規範を持たない民主主義とならざるを得ない。そした宗教的な規範の欠如から、既得の自然科学的知識により、我々は生物としての人間だという人生観にとどまらざるを得ない。またその弱点に適合するコンミニズムを唯一理想とするようにならるのである。

文部省などで道德教育の必要を説くが、道徳そのものも今は社会協同のためのモラルで、社会生活の規約で協同を

識とか理性というものはおのれを安全に保つため最も有利なように舵をとる役目のもので、人格を養成するものではない。よって生物科学による生物的人生観にならざるを得ない。生物人間は細胞現象としての生命体として生きるんだ。生きているうちは出来得る限り、欲求を充足し、生を享樂するんだと思つてゐるらしい。しかし社会の一人として社会協同上の機制を免れない。或者はギヤング的にぶつかつて破ろうとし、或者は柔かな手口で旨く泳ぎ、機に乗じようとする。しかし疲労したり亂れたりしてコンプレックスに悩み、また破ろうとして却つて敗れて悲しみ、それがウツ積して遭り場のない泥が心につまる。或は心の泥を吐き出す途を求める。或は泥を人に社会にぶつけて心を晴らそうともする。それが酒となり女となり或は競輪ともなり、よく進んで運動競技ともなり、芸術表現ともなる。芸術は尊いといふが、現代の一般は宗教や芸術に求めない。芸といつても泥を吐かんとする表現本能に過ぎないものが多いうに思ふ。運動競技にしても、体力伸張や制覇欲のみではあるまい、ぐざぐざする心の泥を吐きさらばせんとするところからもやる。

芸道は久しく心を鍛える道として伝わつた。剣道、柔道、弓道などは人間完成の道とし、殊に文芸はそれである。泥を吐く道、または現実に出来ない虹を吐いて心の遣

りどころのない緊張（欲求不満）を解き、或は排泄するだけ能事終れりとしている向きがある。だから心の緊張が解消されると無用の物として捨ててかえりみない。

それらは道ではない。道とは、道念を深めたり、人生を探求する意で、一のヒューマン（人道）に至る道で、さらに進んでは宗教にいたる道である。

かように若い世代は体力的で明るい。だがやがて老にいたり、生物的に死が前に迫った時、どうか？。或は自分は生物に過ぎない、すべての生物のように死ぬんだと簡単に割り切ろうとするであろう。今の青年は何でも簡単に割り切る。そして割り切れない人間の深さを知らず、生物的動物であろうとしているらしい。

だがやがて死の前に立ち、人生上、おのれの虚無感に襲われる時が来る。生物学者も深きに至ると、生命の不可思議に至り、何らかの宗教の世界の存在を感じるという。

真の宗教は、死の刹那の安住ではなく、生きる魂の安住である。それがやがては死の際の安住をなすのである。

『人生隨想』より

ひとりひとりの内をのぞけばうそざむき独生独死の黒きかけもつ

たのみ來し知命すぎたれ憂ひなほ雲の如くに湧きてとどまらず

己が立てし人生觀にとらはれておのれと生きの世をせばめゆく

念佛自然の外なしといふわが意をばやうやく解して莞爾たり友は

我がどちらの誰彼をむごく批判すればど己が足もとは言はずたがいに

白杵祖山師語錄

御恵みであることがよくうかがわれます。

とかく私達の習わしとして、信心獲得とか安心決定とかいうことに苦しみ、もだえて、暗中摸索するは、いまだ経験せざることであるから無理もないことであります、ここに私達は思わねばならぬことがあります。

それは幸福などということは、いよいよ直面して得られた時よりも、むしろ得んとして求めていた時に味わわれるのではないかということであります。さらに云えば、得られないことを見つめて、そこに求めずに居られない心の起る、この心こそ恵み与えられたものではありませんか。これ全く我れをもって如来を求むるに非ずして、その求むる心すでに如来の御心である。これを更に極度に愛染（あいぎよう）すれば、その求むる心さえ、生起せざる前に、すでにその求むる心、信ずる心を生起すべく立派に恵まれていたことあります。

釈尊の説法についてうかがって見るに、直接手に握ったというよりも、手に握らせるようにして下さる御親切が現われております。更にまた、その握る手そのものが根本の

信楽開発の一念は、頓極頓速、極めて速かな端的であります、その一念を引き起こさしめるためには、五劫の間の思惟攝取と不可思議兆載永劫の御苦勞の全部がおさまつておるのであります。……要するに知覚経験されたる時よりも、未だ知覚経験せざる時の方にこそ一層に道味深い尊さがあるものであります。

○

歌集「雲霧」抄

筑紫野春草

今日は今日の希望に生きてすがすがしゆたかに開く朝顔の花

即ち親を慕う子供よりも、親を呼ぶ言葉さえ知らぬ、また親を思う意識さえ持たない嬰児のそこにこそ、いつも親そのものの離れていないことに気付かねばなりません、そうして恵まれて来た自分、その身の全体が親の御恩の全現であることに思い至るべきであります。

○
信仰の得られたすがたは得られないことに気づくことであり、信ぜられたすがたは信ぜられないことに気づくことあります。

○
……どんな行も及びがたいとしても、信心ばかりはと気張る者があります。これはあまりに表面にあらわれずして微細なものであるだけ、それだけわずらいの深刻味が加重されます。病氣で云えば内出血のようなもので、危険の程度がむしろ表面に現われないものほど容易ならぬ重症である如く、信心一つはとの微細な自力が、非常な苦痛の本でありますことをとくと思わねばなりません。

○
親鸞聖人は、聞けよの教は、聞き得ない自己への鏡であり、信ぜよの教は、信じ得ない自己への鏡である。いよいよ聞く耳のない、信する能力のない愚鴞である。当然と云

の親が手を引くぞという前に、立派に足そのものを与えて下されて居るのであります。足無し子に立てよ手を引くという無理解な親のあるべきではありません。またお土産に絵本を買つて来たから御覧なさいと与うる前に、それを見るべき眼を立派に恵まれてあります。眼を恵まないのに絵本を与えるような残酷な親はありますまい。

○
『安心決定鈔』に
念佛三昧というは、報仏弥陀の大悲の願行が、もとよりまよいの衆生の心想のうちにいりたまえり、しらずして仏体より、機法一体の南無阿弥陀仏の正覚に成じたまうことなりと信知するなり。願行みな仏体より成ずることなるがゆえに、おがむ手、となうる口、信するこころ、みな他力なりといふなり

と。これについても、私自身の知らざる前に私の往生を機法一体に成就下されてましますことであつたのであります。全く手を引く前に足が与えられ、絵本を見せる前は眼を恵まれてある如く、聞く前に聞かれ得べく、信する前に信じ得べく、如来の方より、一切を至心に廻向したまえることを信嘗された聖人であります。

○
「南無阿弥陀仏とたのませたまいて、むかえんとはから

うことから云えは、聞くこと、信すること、それは当然すぎるほど当然なことである、がその当然なことが出来ない大馬鹿者であるということに徹底せられたのであります。必墮無間の愚鴞に徹底されたのであります。地獄には行きたくなし、極楽には参りたいなどを期待する余裕のある善人根性や、聖者氣質とは、全然その歩みがちがつて居られます。

○
他の多くの御祖師方は、名号をよく聞いて信心決定して完全なものになつたら、その全体を至心廻向して、即得往生の利益にあづからうと進まれたが、親鸞聖人は、聞けよといわれても自ら聞き得ない、信ぜよといわれても自ら信じ得ない、疑いを晴らせといわれても自らはらしえない、この愚鴞の身に、如来の方より至心に廻向したまえるところの聞其名号、信心歡喜があつたことに徹底したのである。要するに聞信とか、無疑とかの底を徹去して、何物をも所有しない全体が阿弥陀如来の体現であります。それを言葉に出して見れば、聞かせて下され、信じさせて下され、疑をはらさせて下さるお慈悲であると道味するのであります。

○
親が幼な子の手を引くとき、この手を引くだけが親の力であつて、歩む足は自分の力で運ぶと思うけれども、私達

わせたまいたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもわぬを、自然とはもうすぐとききて候」と聖人自ら仰せられたるは、次のように頂いています。

あだかも子供は親の御恩だとも何とも思つていないままで親の恵みを蒙つてゐる。そこに子供の身安さがあり心のうららかさがある。それだというて氣に入らぬときは、泣いたりわめいたりする。そのなすがままがまた守りづめに守られている。子供としての私の氣持のよしあし知ると否とによらず、昼夜六時に、常恒不斷に照護し養育されている御恩は、私の善し悪し、知る知らぬ、喜ぶ喜ばぬ、得たとか得ぬとかの一辺の限りある畔財（はんぢゅう）に局限さるべきでなく、偉大に不可思議に、より偉大により不可思議であります。

○
親鸞聖人は、地獄でも極楽でも、無理に極楽でなければ往かないと云うような偏僻（へんぺき）ではない、何といふのんびりした氣持でありますか。

如來のめされるところであれば、地獄でも参ります、さらには疑惑や恐怖はいだきません。それは太陽の出るところに暗黒のあるはずがないのと同じく、如來のめされるところに三途の黑暗はないからでありますという確信の発露であります。

○

一寸見ると『歎異抄』の文は、思い切った、また言い過ぎたようですが、決してそうではありません。自己の全体をまかせたならば極楽にしやがんて居るばかりが幸福でない、地獄に墮在して居るのが苦惱でないぐらいの信

嘗（しんしよう）が得られないでどうするか。これもただ親鸞聖人お一人の信嘗でなくして、すべての人々は誰もがこの道味が自然に顕現すべきであります。

苦惱から逃れようと思うところから、遂にかえって苦惱に落ちこむ。……信じ得ない、任せ得ざりし時の親鸞聖人は、地獄を逃れようとして地獄に墮ちた。大菩提を得ようとして、かえって失うたのでありました。

三恒河沙の諸仏の出世のみもとにありしき

大菩提心おこせども 自力かなわで流転せり

という和讃にも、その意味は知られます。しかるに任せたところに

地獄は一定すみかぞかし

と安住された。そこに極樂を発見された。

五劫思惟の第一歩から、兆載永劫の修行を通じて、十劫正覚の曉天に至るまでが、総べてが私の一信心を開發生起

と も し び

聚 墨 生



させるためであります。

聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけりとの仰せも、全く他所ならぬ今の私一人にとりてのことであることに思いいたるべきであります。

○

心というものは、千年経ても、萬年過ぎても、無量無数の歳月を通じ、また山を隔てても、海を渡りても、すべて時間も空間も超越して相即し相通するものであります。

今私が親鸞聖人と相即し、天親菩薩と相即し、釋迦弥陀二尊と總合性心々相承して、ここに始めて私一個の信嘗の体験となり得たことの自らの尊重さと偉大さとを真証せずに居られましようか。古今心を照らし、東西手を握る合掌の交渉は、全く凡仏の人格と人格との照触であります。

○

常不輕菩薩合掌して曰く「我汝を輕しめず、汝等道を行じてまさに作仏すべし」と。（法華經）

この菩薩は仏縁のあるどんな人をも「あなたは仏になれ」と合掌して讀えた。人々はこの得体のしれぬ比丘に腹を立てて、或はののしり、或は石を投げたけれど、比丘はすこしも怒らず、難を遠くにさけて合掌し、相変らず同じ言葉を繰り返して唱え、ただ礼拝一つを行じとおしてやがて成仏し、あらゆる有縁の人々を導いた。この比丘こそ釈尊の前世であると、經に説かれている。

しかし、一切の人々の上にその尊いものを見出し得ない盲の私には、そうしたことは真似することも出来ない身と愧じ入っていた時、フト私自身はこの比丘に投石し罵りつている痴人であると気づかされ、このような私をも合掌

して「あなたも仏になれる」と仰言る比丘のまことごころが身にしみ始めた。良寛さんは、常不輕菩薩をたたえて南無帰命常不輕

とも、また

斯の人以前、斯の人無く

斯の人以後、斯の人無し

とまで随喜していられるが、師もまた私と同じところかと、愚考している。

（四五、七、一二日）

親鸞めずらしき法をひろめず、如來の教法、われも信じ人にも教え聞かしむるばかりなり。

（蓮如上人・御文）

眞実の芸術作品は、作者がその中に自分の影を没して、作者の名をも不用にしている。そうした名作は時代の流れにも消されぬ美しさと、汲めども尽きぬ妙味がある。

孔子は「述べて作らず、集めて大成す」と云い、自分は三皇五帝の道をうけて、古きをたずねて日々は新たなもの

を教えられているばかりであるとのべている。

さて親鸞聖人が生涯をかけ身血を傾注された教行信証は、仏の本願を掲げ、種々の仏典と、高僧の実語を集録された文類で、聖人の言葉は極くわずかである。ことにその中の正信偈には「唯この高僧の説を信ずべし」で結ばれている。この無我の聖人によつて、曇りと凹凸のない鏡に外の景色がそのまま映るように、仏陀の本意と高僧の真意が生き生きと伝えられ、そこに古今を貫き、東西に通ずる不磨の真実が建現している。「仰ぐべし、信ずべし」とは、かかる実語にふれてはじめて出る歎声である。

(四五・八・九日)

○
如來は一切のために常に慈父母となりたまえり。まさに知るべし、もろもろの衆生は皆これ如來の子なり。

(涅槃經)

西欧の詩に「われはそもそも誰なるか、親を求めて泣く子供」とある。或老婆が病苦のはてに、実の娘に看病してもらっているのに「お母さんはどうしているんじやろう、こんなに苦しいのに」と、四、五十年前に亡くなつた母をしきりに呼んだ。これはもうろくしていたせいでもあるが、何人も生死の巔頭に立つ時、親が何よりの頼りであるけれど、亡き母はこたえてくれない。何一つたよるもの

我はこれ賀古の教信沙弥の定(じよう)なり。

(親鸞聖人、御持言)

教信は奈良の学僧であったが、ある日感するところがあつて西に旅し、幡州賀吉川のほとりに庵を結び、日僧などして妻子を養いながら一向に念佛ばかり申して生涯を終えた人であった。聖人はこの教信の、後世者ぶらず、学者ぶらず、在俗の姿のままで、一筋に念佛をよろこんだ信生活を常に御自身の理想の人と慕われている。

憶うに聖人には三度の出家があった。叡山での得度、次に吉水の禪房に入られて念佛門に入り、終りに念佛の法難で流遁を期として非僧非僧の愚禿と名告り、妻子を持たれて大衆の中に姿を没し、本山も本寺も終生お持ちにならなかつたのである。

(四五・九・一三日)

ない孤独の身を、仏はかねてしるしめして「わが名を呼べ久遠の親ぞ」とあらわれて下さる。

五逆の罪を犯した阿闍世が、やがて悲母と愛兒の情にはだされてその重罪に気づき、大苦惱におちた。幸に仏弟子耆婆に導かれ、亡き父王の勵ましをうけて仏陀の教化を蒙り、如来のまことに接して「まさに知るべし、諸の衆生は皆これ如來の子なり」とよろこびたえたのである。

(四五・九・一三日)

— 23 —

される。このことは、独生独死、獨去獨來して永遠に相会うことのできぬわれわれには、またとないよろこびである。

(四五・一・一日)

○
信は道の元、功德の母なり。

(華嚴經)

学生の頃「死の勝利」という小説を読んだ。そこに、相愛する二人が公園で同じベンチに座つて、同じ花を眺めながら、二人は永遠に二人で、一つになれないと歎き悲しむところがある。顔が異なるように心も育ちも別々なわれわれは、そこにどうしても越えられぬ壁がある。詩人は「人生は孤独だ」とよく云うが、その通りで、会いながらも本当に会えないというむなしさが読く。

しかし、大小無数の河川も海に注ぐと一味の潮に転ずるよう、それぞれ異なる罪業の身も、広大な仏心におさめられるると、老少善惡のへだてを超え、時代を超えた一味の世界が不思議にもひらけはじめる。この信知から、やがて淨土において、俱に一處に會うとの教えも自然にうなづか

— 24 —

この小鳥に教えられて、信は道の元、功德の母という仮語をあたらしく味わわされる。信とはまことである。それは我等凡夫と一つ身について、何処までもいつくしんで下さる仏陀の真実心が我身にそそがれている事実を、よき人の仰せにきいておこることころである。親鸞聖人は仏よりたまわるこのまことごころ、真実の信心を本とすすめられそこに無理のない自然の道のひらけることを、九十年の御生涯を貫いてあかして下さったのである。

智慧の眼も、行善の足もない凡夫の成仏の道は、この信心以外にはあり得ない、信こそ、成仏か墮獄かの分水嶺である。

(四五・一・二九日)

あとがき

えられます。

御名のなかに新春を祝ぎ奉ります。
慈光誌も二十三巻になりました。先師、
聖人方をはじめ常に護念下さる法友、恩師
の方々、さらに愛読下さいます方々にあら
ためて御礼を申上げます。

年頭、今年はことに聖人の御晩年の和讃
「如來大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべ
し、師王知識の恩徳も骨を碎いても謝すべ
し」をしみじみと知らされますことがあり
ます。やりそこないばかりを続け、これが
らもそうした域を出られない身をかねてし
ろしめして、ことに憐みたまう如來の大悲
をいのちとさせて頂くばかりであります。
とかく私共は自分の煩惱に都合のよいこと
をお蔭だ、御恩だとよるこび勝ちであります
が、そうした御恩は自分に都合がわるく
なると、碎けて神仏をも恨むようになります
す、世に云う「お蔭信者」は昔この類であ
ります。併し都合のよい時も悪い時も御恩
の中であります、譬えば山に登る時も、山
を降りる時も空氣がなくてはならぬよう
に、そこに御恩をいのちといただいて生き
の限りを送らせて頂く道を聖人の和讃に教

近角先生の『慈愛と眞実』を年頭から続
けて掲げさせて頂きます。
池山先生からの歎異抄聞書は「信を行く
旅人」から抄出いたしました。

柳瀬様の原稿は近著『人生隨想』により

ました。近角先生に親炙されました方々の
多くはすでに老境に達しられて多く淨土に
帰られましたが、柳瀬様は福島先生白井先
生とならんで八旬に入られて、生き生きと

法燈を世に掲げて下さっていますことは、
御礼の言葉もありません。

臼杵祖山老師の語録は、同師の『自然法
爾章』から私自身に深く感銘をうけました
ものを集めました。

ともしげは、日々中日新聞に請われるま
まに原稿用紙一枚に書きましたものを集め
ましたが、字数に制限せられまして舌足ら
ずのものになりました。御判読願います。

御案内

○毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。

一道会例会。市電、新郊通り一丁目下車。

○毎月二十四日、午前午後（但し一月は休
み）

昭和区小桜町教西寺、法話会。市電、御

器所通り。市バス、北山下車。

み)

定価	半 年	二 百 五 十 円	（送共）
	一 年	五 百 円	（送共）
編集・发行人	花 田 正 夫		
名古屋市南区駄上町二ノ八八			
電話八二一局七〇三七番			
愛知県西加茂郡三好町大字福谷			
印 刷 人 吉 野 穂 志 郎			
名古屋市南区駄上町二ノ八八			
振替口座 名古屋一〇四七〇番			
郵便番号 四五七			